

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 大林 侑平

論 文 題 目

初期近代ドイツ語圏における旅行文化の成立  
—1650 - 1820年の旅行記を中心に—

論文審査担当者

主査	名古屋大学 教 授	西 川 智之
委員	名古屋大学 教 授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学 准教授	山 口 庸子
委員	名古屋大学名誉教授	宮 原 勇

# 論文審査の結果の要旨

## 本論文の概要

本論文では、初期近代に成立したドイツ語圏の旅行文化について、17世紀後半から19世紀初頭までの旅行者を巡る一貫した言説と旅行記の叙述様式の変遷という二つの観点から考察されている。論文は二部構成であり、第一部では旅行文化の歴史叙述のための理論的枠組みを提示し、第二部では、その理論的枠組みに準拠し、旅行者が貴族的性格の伝統的規範に即して旅行記における叙述様式や叙述内容を、先行する旅行記とは異なる新奇なものへ変化させていった歴史的趨勢を明らかにしている。

第一部第一章では、ヒトの社会で慣習や規範が成立・変化する生物学的基盤や歴史のプロセスで社会的カテゴリーが果たす役割の重要性について指摘している。社会的カテゴリーは規範的な力を持ち、本論文の分析対象である旅行という文化現象も、こうした社会的カテゴリーが作用する場として考えられる。

第二章では、ヒトの移動という現象を概観した後で、移民と旅行の比較から、1700年以後のドイツ語圏の旅行文化において、旅行者は規範を共有し、単一の社会的カテゴリーに分類されていたと論じている。そしてこの点で、初期近代の旅行文化は19世紀半ば以降のレジャー型旅行とも区別されることを本論文は指摘している。

第三章では、社会的カテゴリーが知識の移動に及ぼす影響を占有形式と取引形式という区分を導入して分析することにより、知識の移動という歴史現象の叙述が可能になることが論証されている。

第四章では第三章の結論を継ぎ、知識の移動という観点から、初期近代の旅行文化が考察されている。1700年頃には、旅行記の記述は、知識の有効性が重んじられていたが、特定地域の旅行者が増大し、旅行記や旅行案内の内容が十分検証可能になったことで、実用的な情報の提示から詩的・神話的風景の叙述へと、その叙述様式が変化していったことが指摘されている。

第二部では、旅行記や旅行案内、作法書、雑誌などの多くの資料を用いながら、旅行記の記述が変化していった過程と、その背後にある、旅行者が一貫して従ってきた旅行文化の規範について考察している。

第一章では巡礼と発見旅行、ツーリズムの差異と連続性について論じた後、18世紀前半までは客観的記述が専らであったツーリズムの旅行記の記述が、先行する旅行記に重複しないように自らの独自の見解を添えて、良き趣味を備えた旅行者として自らを提示するようになったことを論証している。

1700年頃には郵便馬車の制度や街道の整備によって移動が容易になったが、それに伴い旅行者には、政治経済的なイデオロギーを前提に、言語や趣味、倫理的な洗練が旅行によって墮落することなく、国家に有益な見識を獲得することが求められるようになった過程を第二章では論証している。

## 論文審査の結果の要旨

第三章では、実際に学殖者によるイタリア旅行の旅行記や科学者による中南米旅行の旅行記に依拠し、旅行記に記された旅行者としての社交規範や叙述様式がどのように現れていたかが検討されている。18世紀を通じて旅行記の叙述様式が、客観的記述から次第に内省的な記憶や神話的風景の叙述へ変化したものの、それはむしろ、旅行者としての同一の規範が持続的に19世紀初頭の科学者の研究旅行に至っても共有されていたからであるということが論証されている。

さらに第四章では、旅行文化において貴族社会の慣習や規範が維持されていたのと同様に、コレクション文化においても貴族の実践が模倣され、貴族文化の規範が市民に継承され、その規範に従って知識の移動が実践されていたことが明らかにされている。

以上、本論文は第一部・第二部を通じて、文化の歴史変化における模倣や規範性についての理論的な考察と、その考察に依拠する歴史分析を実践し、旅行文化が初期近代のドイツ語圏で成立した過程や旅行記の歴史変化の原理を明らかにしている。

### 本論文の評価

第一部では、進化生物学や言語学、あるいは認識論や論理学などの広範な分野の文献を渉猟し、社会的カテゴリーや、慣習や規範、占有形式や取引形式などの概念を使いながら、独自の理論的枠組みを提示しており、その構想力の独創性と力量には目を瞠るものがある。また第二部では、先行研究に批判的な検討を加え、氏の独自の論点を明確にすることを意識しながら、旅行記や旅行案内、雑誌などの17世紀後半から19世紀初頭の多くの一次資料を、第一部で提示した理論的な枠組みに従って詳細な分析を行っており、研究者としての卓越さをいかに発揮している。

従来、旅行記の通時的研究の多くは、旅行文化が18世紀半ばでくっきり分類され、修養旅行から市民旅行へ変質したことを前提にしていた。しかし本論文は、むしろ旅行者としての同一の規範が持続的に19世紀初頭の科学者の研究旅行に至っても共有されていたのだということを明らかにしている。確かに、旅行記の叙述形式は、実用的な情報の提供から、詩的・神話的風景の叙述へと変化していったが、その一方で1700年ころからの規範が継承されており、貴族的な修養旅行と市民旅行という社会的カテゴリーの断裂は必ずしも旅行文化の実際に即さず、貴族的な修養旅行で確立したツーリズムの規範が一世紀の間維持されていたと結論づけている。これは旅行という文化現象に対する新たな知見として、高く評価されるべき点である。

一方で、審査委員からはいくつかの批判的な意見も出された。第一部は、様々な分野の理論を手がかりに論証が展開されているが、そのためもあって難解であるため、それを整理して、もっと分かりやすく書くべきだったのではないかと、あるいは、第一部と第二部の関係は、もう少し丁寧に説明すべきではないかななどの意見が出された。

## 論文審査の結果の要旨

また、一部の用語の概念規定が曖昧であるとの指摘もあった。しかし、こうした点を差し引いても、本論文全体の価値は損なわれるものではないと思われる。

以上のことから、審査委員一同、本論文が博士学位論文として十分にその基準に達していると判定した。